
秋空

瀧崎直次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋空

【コード】

N3999F

【作者名】

瀧崎直次郎

【あらすじ】

彼は歩く、ただ歩いてその時間をすこし大切にしている

昼休み。

僕たちは机をくつつけて、弁当を開けている。

話題はいつも同じでゲームや漫画の話なんかしている

時にはもう来年に迫った入試の話なんかをすることだってある。

僕は適当に相槌を打って、料理を口に運ぶ。

すぐに弁当箱は空になり、僕達は教室を後にして階段を下りて踊り場にやってきた。

僕たちの話は絶えず、緊張を繰り返す頬はとつくに疲れきっている。

毎日同じような話の繰り返し、それでも僕たちは飽きずにこうして話をする。

その中でも彼らのリズムは伝わって、雰囲気だけで楽しめる。

僕たちは昼休みの短い時を声を合わせて笑った。

授業の時間になって僕は椅子に座りながら黒板を眺める。

黒板一杯に英語を書きなぐってノートを取ることを迫るので、腕を酷使するのに飽きた僕は、ノートに顔をうずめる。

僕は授業に向いてないらしい、そのせいで後で教科書を開かなくてはならない。

六時間目あたりになると時計を凝視し始めてそうこうしている内に放課後になる。

部活に行く人に軽く挨拶を済ませて、僕は鞆に教科書を積めて席をたった。

学校からだと夕焼けが輝いていた。

日もすっかり短くなつたなあ、と無理やり趣きを感じてみたりしても、その光景は美しいながらもありふれてすっかりそんな気は失せてしまう。

校門くぐり、学校前のなだらかな坂を下っていく。

まだ下校をする人は少なく、多くの人はまだ教室で駄弁っているのだろう。

前を隣のクラスの丘野さんが歩いているのを見つけて、僕は少し早歩きをして彼女に近づき、

「こんばんわ。」

僕は右手を軽く挙げて軽く挨拶をした

「あつ、こんばんわ。」

少し驚いて微笑んで彼女はそういった。

放課後時々僕らはこうして一緒に帰る。

たまたま隣を歩いているような、それでいて示し合わせたような。妙な間合いで特に会話もしなく、淡々と歩き続ける。

この妙な感じが好きだ。

普段よりも自然とゆっくりと歩く。

僕は学校で強張った肩をゆっくりと戻して、視線を町へと向ける。

道路跨いで右手にはファーストフード店があつて、部活をやっていた頃には帰り道に食べたりもした。

もう来年には受験が控えている時分で、国体やらに出る人以外は受験モード移行していつている。

僕も例外ではなく、鞆に納まっている参考書の重さが憎らしい。

道路には、車が連なり長い列を作る。

この道路には踏切があつて、ラッシュアワーも重なり混雑していた。あつとヨタか、ホンダか、とつい無意味にメーカー名を気にしてしまふ。

うわっベンツ。

どうでもいいことだが少し幸せだ。

金持ちはいいね。

最近ベンツが増えたように思う、関税の影響か、円高の影響か。眼を前へと向き直す。

マンションの玄関に植えられている木があつて、当然地面にはアスファルトがある。

地面は真つ黒に染まつていて、ゴツゴツとしている。

このアスファルトの模様はこの世に一つしかないことを特別に思つてなんだか少し驚いた。

それから子供みたいなことを考えている自分が少し可笑しくなつた。でも僕はもう子供じゃないから、アスファルトについている黒い斑点がチューイングガムの跡ということも知っている。

それにそれを剥がすのにかなりの手間と労力があることも知っている。

踏切を渡り、歩道橋の下をくぐる。

ブルルルル、ブルルルル。

携帯のバイブレーションが鳴りポケットが揺れる。

僕はポケットの中で携帯を小さく開けて携帯の音をとめた。

隣を歩く彼女は一瞬気にとめたが、何も言わず歩き続ける。

弁当屋の横を通る。

学校の行きしなに昼飯をここで買ったたりもする。から揚げ弁当がおすすめだ。

ケミカルな味がするがそれでこそ弁当屋だろう。

弁当屋から匂いがもれて、鼻をくすぐる。なんて罪深いのだろうか。弁当屋はいつたい何で生計を立てているのか非常に疑問だ。

生徒がこぞつて買いに来てるわけでもないし、あーきつとオフィスなんかで重宝されているのだろう。

すぐに謎は解けて考えることを失った僕はポケットとすることに決め込んで、しばらく道なりに歩いた。

右に曲つて大通りにでる。

大きなスーパーがあつて、そこでしばしばジュースとカップ焼きそばを買つて、家で食べるのもいい。

僕は食べることが好きだな。

カップ焼きそばを食べたのは高校に入ってからだ。

母が嫌いだったので、どんな時でも食卓に上がることはなかった。茹でて食べる焼きそばが気になって部活の帰り買って帰ったのが初めてで、とても美味しかったことを覚えている。

こういふ喜びを成長してから味わえるのはとても幸せだ。

それからしばしば、カップ焼きそばを食べる機会が増えた。

にしても、どうしてあれで焼きそばができるのか不思議で仕方無い。焼くから焼きそばであって、茹でたらそれはもうラーメンだ。

ソース味のラーメンか。

細めの路地に入る。

もうここまできれば、家まではもう少しだ。

僕の思考の裏側には常に彼女があって、その中で緩やかな安堵に包まれる。

というよりも、この距離感がそれを生み出している。

彼女が恋人ではなくて友達でもなくて、ただ隣を歩く人だからこそ、いよいよ住居が多くなり、僕の家も近づいたところで彼女は立ち止まった。

すこし時間をおいて、彼女はいつも笑顔で

「じゃあさよなら。」

彼女はそういった。

「さよなら。」

僕もそう返して、一人路地を進み始めた。

もう暗くなった道に電灯が光って僕の歩調を速めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3999f/>

秋空

2010年10月22日11時03分発行